

5 学習の基盤となる学級集団

学級経営の充実が教育活動の基盤です。学校教育目標や児童生徒の実態や取り巻いている環境を踏まえて学級目標を設定し、全ての教育活動を目標達成のために展開することが大切です。

学級経営の充実を図り、児童生徒が互いの考えを受容し、安心して表現できる環境を整えることが主体的・対話的で深い学びの実現につながります。

一人一人の児童生徒について、集団の中での成長を見つめ、実態を的確に把握して指導することで、児童生徒との信頼関係を築くことができます。

また、児童生徒が集団の一員として認められているという満足感や充実感、連帯感などをもてるようにすることが大切です。互いに協力する学級集団の中で自己有用感を高めることができるようにしましょう。

今日は、〇〇くんと話をしましたか。
〇〇さんをほめる機会がありましたか。
一人一人に声掛けができましたか。
振り返ってみましょう。

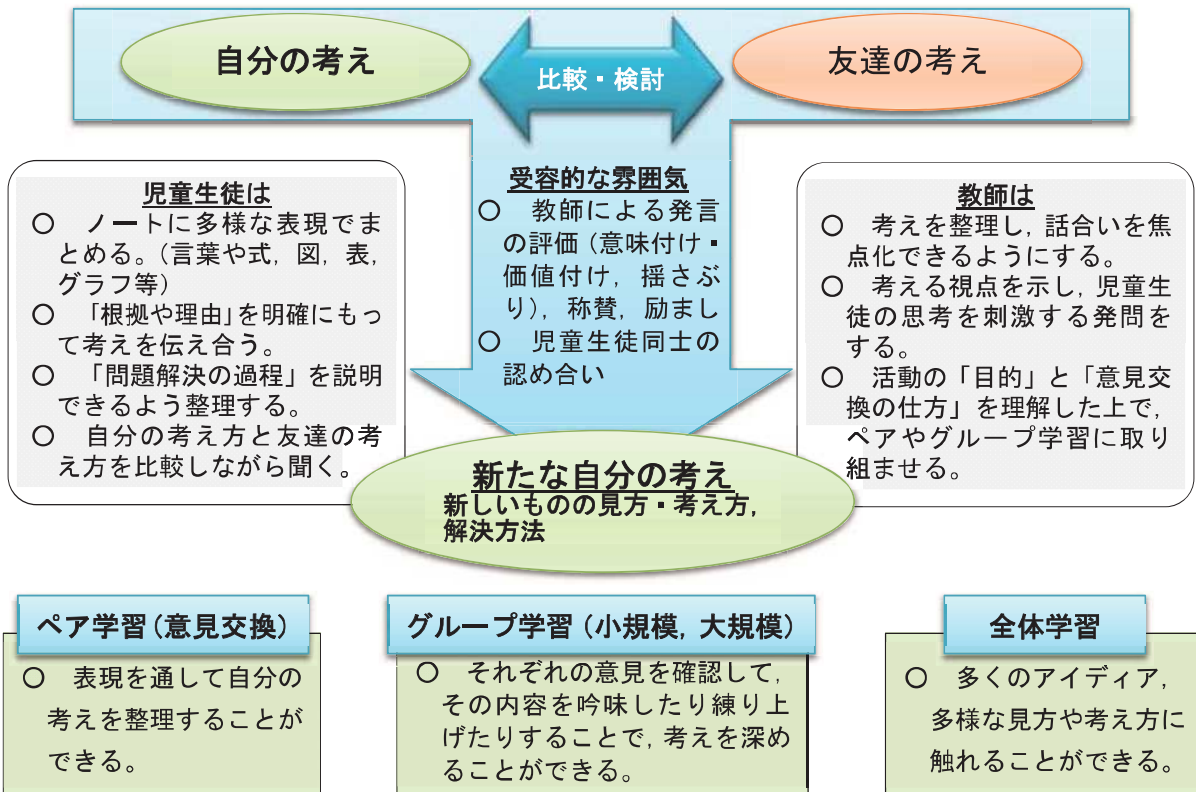


自己有用感の高まり

「先生に認められている」
「友達が認めてくれている」
「自分にはよいところがある」

児童生徒が、主体的に学び、対話を通して互いに関わり合う場を意図的・計画的に設定することで、認め合い、共に学び合う学級が形成されます。

ペア学習やグループ学習を取り入れ、児童生徒同士が主体的に学び合う場を設定することは、思考を広げたり、深めたりする上で効果的です。



授業の目標や目的に応じて、意図的・計画的に学習形態を設定しましょう。

【協議の視点】

- 児童生徒全員が発言できる雰囲気をどのようにすればよいのだろうか。
- 児童生徒の対話が促進されるために、教師はどのように関わればよいのだろうか。



6 子供の学びの姿から始まる校内研修（コアスクールプロジェクト）

教科の枠を超えて教師一人一人が学び合い、子供たちの視点から議論し合う文化を本県に根付かせたいという願いの下、鹿児島大学教職大学院 廣瀬真琴准教授の提唱する IR 研修を基盤として、事業を展開しています。

どんな研修なのか？

1 子供の学びの姿（事実）からスタートする

校内研究授業では、子供たち一人一人の学びの様子を丁寧に見とります。「首をかしげていた。」「すぐに鉛筆を持って書き出した。」等、推測や評価を排除し、付箋に書き込みます。

2 子供の学びの姿（事実）の解釈について交流する

事実のもつ意味や解釈を交流することにより、新たな気付きや発見とともに、授業観や子供観等の観のゆらぎが生まれます。

3 目指す子供像に迫られていたかどうかを検証する

子供の学びの事実の背景を、子供の立場になって考えます。

4 共通実践事項を検討し、実践する

子供たちのために、どんなことをすべきか。みんなで取り組むべき事を話し合い、実践していきます。



どんな効果があるのか？

上記の1～4の手法を取り入れ、授業改善に生かしている学校は、徐々に諸学力調査の結果も向上しています。また、子供の学びの姿から始まる校内研修により、主体的に研修に参加する先生方が増え、積極的に意見交換が行われ、学校全体で目指す子供の姿を追い求めた展望を検討しています。きっとその姿が、子供の学びの姿へとつながっていくと考えています。

コアスクールプロジェクトに参加している学校では、以下のような声が聞かれます。

【コアスクールプロジェクトに参加している学校の先生方の感想】

（参加教員）

子供の学びの姿（事実）の解釈では、多様な見方が見られ、新たな視点に気付かされた。子供を見る目を確かなものにした。

（管理職）

学習者主体という言葉はよく聞くが、子供を主語として語り合う教員の姿が、求められている姿だと実感できた。

（授業者）

教科は異なっても、同じような部分に課題があることが分かり、全校体制で行っていく必要性を感じた。

もっと詳しく知りたいときは

各事務所毎にコアスクール指定校（中学校）が複数設置されています。

今年度は特に中学校区における小学校との合同研修を進めていきたいと考えています。積極的にそれらの学校の校内研修に参加してください。（各学校から案内が届きます）

また、県総合教育センター指導資料「校内研修 第8号 『授業者も参観者もみんなで授業力向上！—子供の姿に着目した授業研究—』（令和2年4月発行）もご覧ください。（右の二次元コードを参照）



7 「ユニバーサルデザイン」と「特別支援教育」の二つの視点

通常の学級にも発達障害等、特別な教育的支援が必要な児童生徒が在籍している可能性があることを前提に、全ての教科等において、ユニバーサルデザインと特別支援教育の二つの視点で学習環境づくりと授業づくりを考えましょう。

ユニバーサルデザインの視点

ユニバーサルデザインの視点による授業では、参加している全ての児童生徒が学びやすい工夫や配慮を行うことになります。そのような配慮は、特別な教育的支援が必要な児童生徒にとっては「なくてはならない」ものであり、そのほかの児童生徒にとっても「あると有効」な指導・支援となります。



学習環境づくりのポイント

- 教師自身の意識
 - 称賛等による主体的な学習の促進 等
- 感覚（視覚・聴覚等）の刺激への配慮
 - 掲示物や設営物の配置や配色 等
- 座席の位置等への配慮
 - 本人が最も集中できる位置 等

授業づくりのポイント

- 板書の工夫
 - 文字の大きさ、チョークの色使い 等
- 学習の方法の理解促進のための工夫
 - 学習手順の提示 等
- 思考、判断、表現を支える手掛かりの工夫
 - 具体物や半具体物の提供 等
- 簡潔かつ明確な説明・指示の工夫
 - 1回の指示に、一つの内容 等
- 児童生徒の集中力を維持したり、気持ちを切り替えたりできる活動設定の工夫
 - ゲーム性のある身体を使った活動 等

記載されている以外の工夫について考えてみましょう。



特別支援教育の視点

ユニバーサルデザインの視点による授業だけでは、障害等による困難さを軽減できない児童生徒がいます。そのような場合は、一人一人の教育的ニーズに応じたきめ細かな指導・支援が必要になります。



地図等の資料から必要な情報を見付け出したり、読み取ったりすることが困難な場合には、読み取りやすくするために、地図等の情報を拡大したり、見る範囲を限定したりして、掲載されている情報を精選し、視点を明確にするなどの配慮をする。

【小学校学習指導要領解説 社会編 139 ページ】

比較的に長い文章を書くなど、一定量の文字を書くことが困難な場合には、文字を書く負担を軽減するため、手書きだけでなく ICT 機器を使って文章を書くことができるようにするなどの配慮をする。

【中学校学習指導要領解説 国語編 136 ページ】

※ 学習指導要領（平成 29 年告示）解説の各教科編には、障害のある児童生徒などに学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行う際の、具体的な配慮の事例が示されています。



ユニバーサルデザインや特別支援教育の視点から改善できる学習環境は

特別支援教育の視点から、授業づくりにおいて、個別に対応できる手立ては